

第 13 回 JAMS 研究大会 第 1 日目報告

左右田直規

第 13 回 JAMS 研究大会は、2004 年 11 月 6 日と 7 日の両日、中部大学名古屋キャンパスにて開催された。ここでは第 1 日目の記念講演ならびに報告の要旨と議論の要点をまとめることにしたい。

第 1 日目のプログラムは、明石陽至氏(南山大学)の記念講演「私の日本・マラヤ関係研究の 50 年」で幕を開けた。明石氏は日本占領期を中心とする日本・マラヤ関係研究の第一人者であり、日本におけるマレーシア研究の牽引者である。この日の記念講演の中で、明石氏はご自身の研究経歴を辿ることを通じて、半世紀にわたる日・マ関係研究の展開を明らかにした。記念講演という性格上、内容を簡潔にまとめることは難しいので、講演の中で筆者が特に強く印象づけられた 3 点に絞って言及したい。

第 1 点は、日本占領期を中心とする日・マ関係研究における明石氏の先駆的な業績である。明石氏の研究課題は多岐に渡っているが、とりわけ、(1)南洋華僑・華人の抗日救国運動に関する研究、(2)日本軍政の原理と制度に関する研究、(3)日本占領下の文化・教育政策とその実践に関する研究における功績の大きさははかりしれない。明石氏の業績を道標としつつ日本占領期の日・マ関係研究は射程を広げており、現在では経済問題、労務者問題、ジェンダー問題など様々な分野が研究対象となっているほか、

マラヤ・シンガポールだけでなくボルネオにおける日本人の関与についても明らかにされつつある。

第 2 点は、日・マ関係研究の一次資料の整理と公刊における明石氏の多大な貢献である。明石氏が日・マ関係研究に着手するきっかけとなったのは、ジョージタウン大学に留学中の 1950 年代後半に、満鉄や旧日本軍の資料の整理作業に携わったことであった。敗戦後に資料が焼却されたり散逸したりしたこともあり、日本占領期の資料へのアクセスは容易ではなかったが、1966 年に「徳川資料」が防衛庁に寄贈されるなど、日本占領期のマラヤに関する資料は徐々に整備されていった。こうした軍政関係資料の収集や整理において明石氏が果たした役割は極めて大きい。例えば、明石氏による占領期の関係者に対するインタビューの記録は、関係者の大半が亡くなった現在、非常に貴重な口述資料となっている。また、防衛庁防衛研究所などの所蔵する軍政関係資料が明石氏によって編集、公刊されたことによって、占領期の一次資料の収集が格段に容易になったことは特筆すべきだろう。

第 3 点は、明石氏が日本占領期を中心とした日・マ関係研究の成果を海外に積極的に発信していることである。注目すべきは、研究論文の過半数が英語で執筆されており、海外の研究者、とりわけマレーシア人の研究者に研究成果が還元されていることである。また、日本語で書かれた

一次資料の英語による文献改題や回想録の英訳なども、地味ではあるがたいへん貴重な業績である。日本語という大きな障壁が存在する日・マ関係研究の分野において、明石氏の業績は、海外の研究者が日本語の一次資料や最新の研究成果にアクセスするための重要な架け橋となってきたといえるだろう。

なお、南洋華僑・華人の抗日救国運動に関する明石氏の初期の研究は、Yoji Akashi, *The Nanyang Chinese National Salvation Movement, 1937-1941* (Lawrence: Center for East Asian Studies, University of Kansas, 1970) として公刊されている。1970年代以降の明石氏の一連の研究論文を所収した単著も公刊されれば、後に続く研究者にとって大変に有益であり、有難いことだと思う。誠に勝手ながら、強く期待する次第である。

明石氏の記念講演に引き続く、望月雅彦氏(ボルネオ史料研究室)の報告「英領北ボルネオの日本人——中川香港領事の視察復命書(1894)年を中心に」は、香港領事中川恒次郎の視察復命書(1894年)を手がかりにして、中川領事が英領北ボルネオを日本人の移住先としてどのように捉えていたかを明らかにしようとするものであった。

望月氏によれば、中川領事の北ボルネオ視察の背景には、1893年の稲田新之助によるチンバング(ティンバン)島への日本人入植計画や、青木周蔵ドイツ公使からもたらされた電文による「北ボルネオ買収案」が存在していた。視察復命書

のなかで、中川領事は、国威発揚の利点はあるが、植民地経営上の利益に乏しいため、日本人の移住地として北ボルネオを買収することは得策ではないという意見を示した。中川領事によれば、北ボルネオは交通の要衝でも重要な鉱産物の産地でもないうえに、主産業の一つであるタバコ生産も投機的な性格を帯びており、安定した歳入源は乏しかった。また、現地の住民はイギリス人に敬意を払っているが、日本人移住者(「からゆきさん」)によい印象を持っておらず、日本人が現地社会から尊敬を得るにはかなりの努力が必要だった。タバコ栽培の労働条件も過酷であり、気候風土も日本人に適さないとして、日本人の移住先としてはふさわしくないとされた。このような中川領事の否定的な見解は北ボルネオ買収が実現しなかった要因のひとつとして考えられる、というのが望月氏の結論であった。

望月氏の報告に対しては、以下のような質疑応答があった。

赤嶺淳氏 なぜベルリンの青木公使が「北ボルネオ買収案」を持ってきたのか? → 望月氏 原不二夫氏の本で確認してほしい。原氏の補足 北ボルネオ会社はオーストリア人とイギリス人の共同所有だったので、オーストリアに近いドイツ公使が話を持ちかけた。

原氏 復命書の中から中川領事と北ボルネオ会社とのやりとりは分かるか? 北ボルネオでは中川領事は買収に積極的だったといわれている。→ 望月氏 両者のやりとりについては分からない。

原氏「冥加金」は一種の徴税請負を指すのか？→ 望月氏 その通りである。

加藤剛氏 当時の北ボルネオへの移住計画や買収案は日本の植民政策の中でどのように位置づけられるか？→ 望月氏 北ボルネオは日本の植民政策の中では周辺の位置づけがなされており、植民政策全般への影響は小さかっただろう。

2 本目の報告は鳥居高氏(明治大学)の「マレーシア・マハティール政権:研究課題の“ABC”」であった。鳥居氏は22年に及ぶマハティール政権の特質を明らかにしたうえで、今後の研究課題の所在を指し示した。

マハティールが首相として政権を担当した時代を暫定的に「マハティール時代」と定義したうえで、鳥居氏は、マハティール時代のうちでマハティールが政治経済の両面でフリーハンドを得た時期は、(1)1982年総選挙から84年後半の経済不況まで、(2)1990年の総選挙から97年のアジア・通貨危機までの2つの時期に限定されていると指摘した。また、鳥居氏によれば、マハティールがやろうとしたことは(1)開発(狭義の工業開発)、(2)ブミプトラ企業家の育成、(3)マハティール版「イスラーム化」の3つのキーワードに集約でき、それぞれは相互にリンクしている。また、マハティール時代におこったこととして、(1)UMNO 内政治の激化、(2)自由化の2つのキーワードが挙げられるという。

マハティール時代の研究課題として重要なのは、(1)A(Agama):国家によるイスラーム促進

に関する研究、(2)B(Bureaucracy):開発政策の決定と実行に関する研究、(3)C(Capitalist):企業グループに関する研究である、というのが鳥居氏の見解であった。

以上の鳥居氏の報告に対して以下のような質疑応答がなされた。

山本博之氏 マハティール時代の首相と副首相との関係はどうなっているのか？→ 鳥居氏 首相と副首相との間の関係については不明な点が多いが、開発政策に関しては、首相を長とする委員会が開発予算を作成し、副首相を長とする委員会が開発の実行をチェックするなどの役割分担が見られた。金子芳樹氏の補足 首相と副首相との関係については制度的な分担よりも具体的な人物の組み合わせの方が重要だろう。

金子氏 マハティール時代はどのように時代区分できるか？→ 鳥居氏 (1)1981~82年、(2)1982~84年、(3)1984~90年、(4)1990~97年、(5)1997~2003年、という時代区分ができる。

加藤氏 経済成長の果実はうまく分配されたのか？貧困研究の現状は？→ 鳥居氏 (分配よりも成長を重視したといわれるマハティール政権期の) 貧困研究についてはジョモ氏などを中心に進められてきている。なお、アブドゥッラー新政権は所得分配に力を入れようとしている。

加藤氏 マレーシアでは多民族のテレビ番組が増えているようだが、国民統合政策に新しい方向性が出ているのか？→ 鳥居氏 新政権はブミプトラの優遇とバンサ・マレーシアの創出を両立

させようとしているが、今後の展開が注目される。

＜左右田＞「何をやろうとしたか」に関する 3 つのキーワードと、「何がおこったか」と関する 2 つのキーワードとを截然と分けることができるのか？
→ 鳥居氏 前者の 3 つのキーワードには「思ったほどには実現できなかった」というニュアンスが込められているが、後者の 2 つのキーワードのうち自由化は前者に含めることも可能であり、両者を明確に区別することは難しい。

第 1 日目のプログラムは大会委員の創意が感じられる構成であった。明石氏による記念講演は、マレーシア研究の先達が新たな研究分野を開拓していった貴重な経験を後進に伝えるうえで、非常に有意義なものであった。今後の研究大会でも今回の記念講演のような試みがなされ、いわば本誌の「巻頭言」に相当するような、第一人者の方々によるお話を聞くことができれば幸いである。なお、記念講演という性格にはなじまないかもしれないが、多少なりとも討論の時間があれば、今後の研究課題について議論を深めることができたのではないだろうか。

望月氏の報告は、日本・マレーシア関係史研究の新たな展開の一端を示すものとして、明石氏の記念講演に続く最初の報告にふさわしい内容であった。英領マラヤに比べると研究蓄積が少ない北ボルネオにおける日本人の関与に関する非常に貴重な研究であり、今後のさらなる発展が待ち望まれる。欲を言えば、序論のところでは先行研究の批判的検討がなされ、日本・北ボル

ネオ関係史の大まかな流れが整理されていれば、本報告の位置づけや独創性がより明確に伝わったのではないだろうか。

鳥居氏の報告は、マハティール政権に関する重要な研究課題を明確に整理した大変に有益なものであった。一般にはマハティールの個性や指導力に注目が集まりがちであるが、マハティール政権といえども前後の政権との継続性は強く、政権の期間中ずっとマハティールが政権運営のフリーハンドを握っていたわけでもない、という冷静な指摘は傾聴に値する。政策運営に焦点を当てた鳥居氏の論点整理に対して、日常生活世界からマハティール政権の 22 年間を見た場合にはどのような研究課題が浮かび上がってくるのか、政策運営と人びとの日常生活との間にはどのような相互作用があり、どのようなギャップがあるのか、ということも考える必要があるように思う。

最後に、たいへん興味深いお話をいただいた講演者ならびに報告者の方々、本大会の準備にあられた会長、大会委員、事務局の方々に心から感謝の念を表したいと思う。